

琉球大学学術リポジトリ

楊尚眞（2022）「日本で知られていない同性愛と同性婚の真相」への反論：同性愛の先天説と後天説について

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2023-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 克哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019580

楊尚眞 (2022) 「日本で知られていない同性愛と同性婚の真相」 への反論：同性愛の先天説と後天説について

金城 克哉

1. はじめに

2022年6月13日、神道政治連盟国会議員懇談会で弘前学院大学教授の楊尚眞の講演録を収録した冊子が配布されLGBT当事者から反発の声が上がった。当該冊子の中では「同性愛は心の中の問題であり、先天的なものではなく後天的な精神の障害、または依存症」「(同性愛などは)回復治療や宗教的信仰によって変化する」「世界には同性愛や性同一性障害から脱した多くの元LGBTの人たちがいる」「LGBTの自殺率が高いのは、社会の差別が原因ではなく、LGBTの人自身の悩みが自殺につながる」などと主張されていたという(松岡2022)。筆者自身は本稿の執筆時点で当該冊子を手でできていない。本稿では上述の冊子に関連する楊論文、「日本で知られていない同性愛と同性婚の真相」(2022a)に記されている「科学的」記述が偏った見方であり、このような偏った認識に基づいた知識を立法府の議員をはじめ一般の日本人が嚙呑みにすることのないように、同論文の主張に反論を加えるものである。

ここで本稿が前提とする事柄について触れておく。まず科学的な研究に関する基礎的なことである。同性愛に関する研究は特にアメリカで盛んになされてきており、文献もかなりの数にのぼる。そのほとんどは科学的な研究結果であり、観察や実験データによって得られた知見をもとに結論を導いている。科学的な言説は何よりも客観性を重視する。本論で詳しく述べるが、例えば「なぜ人は異性に惹かれる人がいる一方で(異性愛)、同性に魅力を感じたり(同性愛)、男女どちらも性愛の対象としたり(両性愛)、どちらの性にも性愛感情を抱かない(アセクシュアル)人がいるのか」という疑問に、脳科学、遺伝子学、内分泌学、精神分析学などさまざまな分野から研究がなされてきた。それらの研究は単なる「主観的な考えに基づく主張」ではない。科学者はまず「仮説」を立て、観察をし、仮説を検証するための実験を行い、その結果得られたデータが仮説を支持するものであるかを検討する。また、ある研究者や研究グループの検証(実験)が他の科学者によって追試可能であり、同じ結論になることが確認されたときにそれが「理論」となる。科学的手法は次のようにまとめられる(シャーマー2003:57)：

仮説：観察結果に対する追試可能な説明。

理論：基盤がしっかりとて、よく吟味された仮説、または仮説群。

事実：一時的な同意が得られる程度には論理的であると認められた結論。

2. 楊論文(2022a)の構成と主張

楊の論文「日本で知られていない同性愛と同性婚の真相」(2022a)はQ&A形式で全部で26のクエスチョンとそれに対する回答から構成される：

- Q.1 同性愛は自らの意思に基づいて選択・変更できないのですか？
- Q.2 同性愛が先天的でないことを示した研究としては、どのようなものがありますか？
- Q.3 同性愛は先天的・遺伝的であるという説には、どのようなものがありますか？
- …
- Q.26 日本におけるLGBTに対する誤った認識はどのようなものですか？

楊(2022a)の主張は次のようにまとめられる：

- (1) 同性愛は後天的なものである。
- (2) 同性愛と同性婚を権利として容認することによって公共の福祉が侵される。
- (3) LGBTを含めすべての人の尊厳性や人格は尊重されねばならないが、LGBTのライフスタイルは問題である。

同性愛は生まれ持った性質なのか、それとも家庭環境や幼児期の体験などの生まれた後の社会環境に影響を受けた結果なのか。これが先天的か後天的か(“nature or nurture”)の議論である。本稿では楊の主張(1)に絞って議論を進める¹。

3. 先天的要因について

3.1. 遺伝子学

楊は「Q1. 同性愛は自らの意思に基づいて選択・変更できないのですか？」という問いに答える形で次のように述べる：

楊の主張(1)

同性婚容認の根拠とする同性愛的性的指向は、運命的に与えられた先天的なものではなく、人を取り巻く生活環境や経験に影響され、後天的に生じたもので

¹ 本稿では同性愛が先天的か後天的かを扱う。楊は同論文で性同一性障害も後天的なものであると主張しているが、性的指向(同性愛)と性自認は別のものであり、両方を同時に論じることはできないため、本稿では同性愛に焦点を絞った。

す。つまり、同性愛は生まれつきで変わることがない性的指向ではありません。今まで、米国において同性愛に関する科学的な研究結果が多くありますが、日本では殆ど紹介されませんでした。日本人の殆どが、同性愛は生まれつきで変わることのない性的指向であると誤解しています。(楊 2022a: 63)

楊は続けて「Q.2 同性愛が先天的でないことを示した研究としては、どのようなものがありますか？」に答える形で主張 (1) の根拠として遺伝子研究の結果を引用している。これは 2019 年 8 月 30 日に学術誌『サイエンス』に掲載されたものである。人間の多くは異性愛者であるにもかかわらず同性愛者が存在することについて、同性愛というのは遺伝子の変異に起因するのではないか、同性愛遺伝子と言えるようなものがあるのではないかというのがこの遺伝子学的アプローチの仮説である。

この 2019 年 8 月の『サイエンス』誌の論文では約 50 万人のゲノム (遺伝情報) が解析されたが、「ゲイ遺伝子」は見つからなかったとされる。ニュース記事から研究者の言葉を引用する：

「同性愛をつかさどる特定の遺伝子はないし、自分が同性愛者になるかどうかを遺伝子検査で突き止めようとしても無駄だ。ゲノムから個人の性的行動を予測することは実質的に不可能だ」(BBC NEWS JAPAN 2019.8.30)

この研究では「同性愛が先天的なものであれば、同性愛になる遺伝子が存在するはずである」という仮説が立てられたがそれは否定された。論理学の記述を用いれば、次のようになる：

- (1) 同性愛が先天的なものであるならば、同性愛に関する特定の遺伝子が存在する。
- (2) 研究の結果、特定の遺伝子は見つからなかった。
- (3) よって、同性愛は先天的なものではない。

さて、ここで問題になるのが、上記 (1) の後件「特定の遺伝子が存在する」である。「先天的である」ことを証明するためには、約 50 万人の遺伝子研究で必要十分なのだろうか。これ以上の研究は必要ないのか。この研究には検証が必要ではないか。

科学者は日々実験や観察を続け、新しい知見を得る。その積み重ねこそが私たちの文化を発展させる礎となってきた。さて、上述のゲノム解析の結果は最終的な「結論」であろうか。否、そうではない。イギリス人とアメリカ人からなる対象者を約 50 万人解析したといってもそれで全てがわかったわけではないはずだ。実際に 2021 年 2 月には東大の研究者チームによって性的指向についての新たな知見が加わった。日

本経済新聞ウェブ版（2021.2.27）の添付資料から引用する：

東京大学大学院農学生命科学研究科の大久保範聡准教授らの研究グループは以前、メダカの脳内の配偶行動に関わるとされる領域で、女性ホルモン受容体の一種 Esr2b が、性成熟したメスだけで発現していることを見出した。このことから、メダカでは Esr2b がメスの配偶行動に関わると予想された。その予想を検証するため、研究グループは今回、基礎生物学研究所、大阪大学大学院医学系研究科と共同で、TILLING 法（注 5）を用いて、約 6000 匹のメダカから Esr2b 遺伝子に変異したメダカを 1 匹見つけ出し、その変異を受け継いだ子孫の配偶行動を解析した。

解析を行った結果、Esr2b 遺伝子に変異が生じたメダカのメスは、通常のメスと変わらない外見と卵巣をもち、オスからアプローチされる（人間の世界でいう「モテる」状態）にも関わらず、オスの求愛を受け入れず、産卵に至らないことが分かった（図 1、図 2）。さらには、あたかもオスのように、他のメスに対して求愛する（メダカのオス特有の求愛ダンスを踊る）ことが分かった。たった一つの遺伝子に変異が生じただけで（しかも、自然界でも偶発的に起こり得るたった 1 塩基の変異で）、メス型の性指向と配偶行動パターンが消失し、さらにオス型に逆転したことは大変意外な結果だったと言える。メダカでは、Esr2b は性指向と配偶行動のメス型化を促進するとともに、オス型化を抑制する作用をもち、それらがオス型になるかメス型になるかを定める決定的な因子であると考えられる。（原文の注と図は引用者により省略。下線は引用者）

この研究チームのリーダーである大久保範聡はテレビのインタビューで次のように語っている（テレ朝 news 2021.2.27）：

メダカの結果がそのままヒトに当てはまるとは考えていませんが、メダカの場合は性指向が簡単に変わる仕組みが見えてきました。これは裏を返せば、なぜヒトの場合には性指向ががっちり固まって変わらないのかを理解することに繋がり、長い目で見ればヒトの性のありようというかセクシュアルマイノリティ（性的少数者）の人たちをふくめたその性の理解にも繋がるものと考えています。（下線は引用者）

メダカではたった一つの遺伝子に変異が生じただけで性的指向が容易に変わるという観察結果が得られた。これはそのまま人間にあてはまるものではないが先天性を支持する根拠となる。

次に、楊はこのような遺伝子学の研究でも同性愛が先天性のものであるという主張の反例として一卵性の双子の研究が重要だとしている：

楊の主張 (2)

また、一卵性双子の研究結果がありますが、同性愛が先天性のものであれば、先天性に同一の影響を受ける一卵性双子両者の同性愛一致率は、必ず 100% でなければならないですが、研究結果は、約 10% です。双生児の中で片方は同性愛をもち、他方はもたないという事実は、同性愛は生得的なものではないということを示しています。(楊 2022a: 63)

私は生物学の専門家でも遺伝子学の専門家でもないため、この文章を初めて読んだときにはこの主張が妥当であるように思われた。しかし、調査を進めるに従い実はそうではないことが分かった。ここで用いられている楊の論理は次の通りである：

- (1) 同性愛が先天性のものであるならば、一卵性双生児の性的指向は 100% 一致する。
- (2) 研究の結果、一方が同性愛で他方も同性愛である割合は 10% であった。
- (3) よって、同性愛は先天性のものではない。

ここで問題なのは前提となっている「一卵性双生児の遺伝子情報は 100% 一致する」という部分である。最近の研究では、「一卵性双生児の遺伝子情報は 100% 一致するわけではない」ということが分かっている。ニュースウィーク日本版のウェブ記事 (2021.3.15) から引用する：

米アラバマ大学の研究チームは、2008 年 2 月に発表した研究論文で、「一卵性双生児のゲノムは同一ではない」ことを示した。

アイランドのバイオ医薬品会社デコード・ジェネティックスの研究チームが一卵性双生児 381 組とその親、配偶者、子を対象に遺伝情報を解析した研究でも、これを裏付ける結果が出ている。

研究チームは、2021 年 1 月 7 日、遺伝学専門学術雑誌「ネイチャージェネティックス」で「初期発生段階で発現した平均 5.2 個の突然変異により、一卵性双生児は異なる遺伝情報を持つ」との研究論文を発表した。

なかでも、約 10.2% にあたる 39 組で 100 個以上の突然変異があった。その一方で、遺伝情報が同一であったのは 38 組で、全体の約 9.9% にとどまっている。また、一卵性双生児の約 15% では、初期発生段階で発現した突然変異が一方の双子に顕著に多くみられ、他方にはみられなかった。(下線は引用者)

一卵性双生児で遺伝子情報が100%一致していたのは全体の約9.9%であったという研究結果は、楊の指摘する10%とほぼ合致する。つまり、一卵性双生児の性的指向が10%しか合致しなかったのは当然の結果であり、先天説を支持する根拠となる。

次に楊は加齢と性的指向の変化、大都市と地方での同性愛の割合について次のように述べている：

楊の主張 (3)

そして同性愛が先天的・遺伝的な性愛であるならば、加齢しても同性愛の性的指向は変わってはなりません、加齢することによって、その比率は減少する事実を、1994年、ラウマン(E.O.Laumann)らの研究調査は発見しました。彼の研究調査によると、50代の同性愛者の比率が20代の同性愛者の比率と比べて半分に下落していました。また、大都市で青少年期を過ごした人が、地方で青少年期を過ごした人よりも同性愛をもつ比率が高い事もわかりました。これは、同性愛とは先天的なものではなく、自分を取り巻く環境によって影響を受けるという事です。(楊 2022: 64)

楊はLaumann et al. (1994) のどのページでこれらの主張がなされているのか明示していない。そこで筆者は年齢および同性愛者の居住地について記されているTable 8.2 (Laumann et al. (1994:305)) を抜粋して以下に示す(表1)。楊の主張(3)の最初のポイントは「加齢によって性的指向が変化する」というものだった。しかしながらLaumann et al. (1994)の研究は特定の同性愛者の性的指向の経年変化を調査したものではない。様々な年齢層から被験者を抽出しインタビュー調査をしたものである。表に“Identity Homo/Bisexual”の項目があるが、ここで示されているのは各年齢層での同性愛者もしくは両性愛者を自認する人の割合を示しただけにすぎない。18歳～29歳の割合が2.9%であるのに対して50歳～59歳の割合が0.5%になっていることを根拠に加齢によって性的指向が変化しているとは言えない。50代で自分が同性愛者・両性愛者と認める割合が20代に比べて極端に少なかったのは、別の原因、例えば社会の偏見やスティグマを恐れていた可能性もある²。よって楊の主張は退けられる。

² Robertson et al. (2018) は被験者に性的指向のようなセンシティブな質問に対してどの程度安心して答えられるかを調査している。結果、最も快適さを感じたのは匿名のオンライン調査であったという。Laumann et al. (1994) のような対面式のインタビューでは被験者の自己開示は難しくなると推測される。

表 1: 同性 (SG) セクシュアリティの特定の社会的および人口統計学的変数別割合

	Identity, Homo/Bisexual	
	M	W
Age :		
18-29	2.9	1.6
30-39	4.2	1.8
40-49	2.2	1.3
50-59	0.5	0.4
Place of residence:		
Top 12 central cities (CCs)	9.2	2.6
Next 88 central cities	3.5	1.6
Suburbs top 12 CCs	4.2	1.9
Suburbs next 88 CCs	1.3	1.6
Other urban areas	1.9	1.1
Rural areas	1.3	0.0

また、アメリカの周辺都市（1.3%）に比べて12の代表的な大都市に同性愛者・両性愛者の割合が高い（9.2%）ことも表で示されているが、このことから直ちに「大都市で青少年期を過ごした人が、地方で青少年期を過ごした人よりも同性愛をもつ比率が高い」とは言えない。Levine（2022）の研究では性的マイノリティ（非異性愛者など）は、異性愛者よりも成人期への移行において地理的に移動しやすいことが報告されている。それまで比較的人口の少ない地方都市に住んでいた同性愛者・両性愛者が大学進学などを機に「仲間」の多い大都市へ移り住むということは十分考えられることであり、Laumann et al.（1994）のこの調査結果だけを根拠として大都市という外的環境が被験者の性的指向を変化させたとは言えない。

3.2. ホルモンのはらへの影響

次にホルモンのはらについて楊は「Q.3 同性愛が先天的・遺傳的であると言う説には、どのようなものがありますか？」という問いに答える形で次の主張をしている：

楊の主張（4）

同性愛を先天的なものであるという、環境ホルモン説が横行しています。500種類の人人口化学物質のうち、環境ホルモンと呼ばれるものが男性の精子数・精液量の減少、精子の運動能の低下、精子の奇形率、精巣がんの発生率増加、女性の乳がん、子宮内膜症の増加などの内分泌系異常、神経系、免疫系の異常をもたらすという報告がありますが、それが同性愛や性同一性障害をもたらす要因であるという、立証された科学的な研究結果はありません。万一、環境ホルモンが、上記のような人体に健康被害をもたらし、それが確実に同性愛や性同一性障害の要因であるとするならば、その環境ホルモンを未然に防ぐための研究が求められることになるでしょう。（原文ママ）（楊 2022a: 64）

「先天性」の議論に「環境ホルモン」を持ち込むのはミスリーディングである。また、楊はここでは「環境ホルモン」についての文献に全く触れていない。google scholarで「environmental, hormone, homosexuality」で検索しても該当するような文献はない。「環境ホルモン」ではなく、胎児が母親の胎内にいる間に何らかの内分泌系の影響を受けているのではないか、それが原因で性的指向に変化が起こるのではないかというのがもともとの科学的な検討事項であり、これには多くの研究結果がある。

3.2.1. 主張 (4) に対する反論 (1)

2018年にはイギリスのエセックス大学の研究で「人差し指と薬指の長さが違う女性は、同性愛者になる可能性が高い」という指摘がなされた。BBC NEWS JAPANの記事を引用する：

エセックス大学の研究チームは、女性の一卵性双生児 18 組の指の長さを測った。いずれの双子も、1 人は異性愛者でもう 1 人は同性愛者だ。平均して、人差し指と薬指の長さが異なる特徴は、同性愛者の女性にのみ見られた。これは一般的に男性、特に左手だけに見られる特徴だ。これは、胎児の時に「男性」ホルモンのテストステロンをより多く浴びたからかもしれないと、研究チームは解説する。研究チームはまた、男性の一卵性双生児 14 組の指も測定した。女性と同様に 1 人が異性愛者、もう 1 人が同性愛者の双子だが、ここでは指の長さとの性的指向に関連性は見られなかった。男性も女性も子宮内でテストステロンを浴びるが、より多く浴びる場合があるのかもしれないという。論文を執筆したエセックス大学心理学部の講師、チューズデー・ワッツ博士は、「遺伝子がまったく同じ一卵性双生児で性的指向が異なることがある。なのでこの違いには、遺伝子以外の要因があるはずだ」と話す。

「性的指向は子宮内で決定され、浴びる男性ホルモンの量や、ホルモンに各自の体がどう反応するかで、異なることが、研究からうかがえる。より多くのテストステロンに触れた人は、バイセクシュアルまたはホモセクシュアルになる可能性が高い」

「ホルモン量と指の長さの違いには関連性があることから、人の手に注目すれば、その人の性的指向のヒントがあるかもしれない」

(BBC NEWS JAPAN 2018. 10. 18, 下線は引用者)

一卵性双生児の遺伝子情報が 100% 同一であることはないと先に指摘したが、ここでは指の長さ（ホルモン量に影響される）と女性の性的指向に相関関係が見られたというものである。これは先天説を強く支持する。その一方で、男性同性愛では同様の結

果が得られなかったため、この研究についてはさらなる検証が必要である。

3.2.2 主張 (4) に対する反論 (2)

日本では埼玉大学大学院理工学研究科生命科学部門の塚原伸治がホルモンが胎児に及ぼす影響について重要な研究を行っており、胎生 12～22 週の頃にさらされる男性ホルモンによって心の性別が決められるとする。ウェブ上の記事（日経ビジネス 2016.6.15）を転載する：

この時期の胎児の脳は、性的に未分化な状態で、男性ホルモンの『アンドロゲン』の作用を受けて初めて男性化します。このアンドロゲンは胎児自身の精巣から分泌されるものです。女の子の場合は精巣がないので、アンドロゲンの作用を受けず、脳も女性化することになります。一方、男の子の場合でも、アンドロゲンが十分働かなかつたりすると、脳が女性化し、遺伝子上の性別との不一致を招くことになるのです。ただ、このようなことがなぜ起きるのかまでは十分解明されていません。

さらに最近の研究では、お腹の中にいる発達期だけでなく、思春期も脳の性別に大きな影響を及ぼすことがわかってきました。第二次性徴期（せいちょうき）と呼ばれる思春期は、性ホルモンの分泌が盛んになり、心身ともに大人の男性、女性へと変わっていきます。詳しいメカニズムは解明されていませんが、この時期に分泌される男性ホルモンや女性ホルモンの働きによって、脳も男性の脳、女性の脳へと発達していくのです。いわば、心の性別の仕上げの時期と言えます。（筆者注：塚原（2018）も参照のこと）

母親の胎内で男性ホルモンのアンドロゲンが十分働くか働かないかで脳の性別（＝心の性）が決まる。つまり、ホルモンの影響によって男性を好きになるか女性を好きになるかという性的指向が決まるという。この研究による知見は同性愛が先天的であることを裏付ける十分な根拠となりうる。

3.3. 動物とヒトの同性愛

次に楊は同性愛行動がヒト以外の動物にも見られることについて次のように主張する：

楊の主張 (5)

また、同性愛は何種類かの動物に現れる現象であるので、人間が同性愛をもつことは自然であるという主張がありますが、動物の同性愛といっても、動物が同性

同士交配をすることですが、それはその何種類かの動物に先天的に組み込まれた生理的な要素によるもので、人間の同性愛は先天的に組み込まれた生理的な要素ではありません。そのような同性同士の動物の交配を、人間の同性愛の性行為と同じ次元で捉えることに関して、科学的な妥当性はないのです。そもそも、動物は衝動的で本能的で単純な行動をする存在ですが、人間は、理性と知性や良心を備えている存在であるので、動物とは次元の異なる存在です。(楊 2022a: 64)

楊の論文のこの主張 (5) は裏付けとなる (科学的) データに基づかないものである。ヒト以外の他の動物でも同性愛行動が見られることについて、それはその動物に先天的に組み込まれた生理的な要素であると認めながらも、人間の場合はそうではないと言う。なぜなら動物は衝動的で本能的で単純な行動をするが、人間には理性と知性、そして良心がそなわっているためだとする。この主張通りならば、なぜ理性・知性・良心のある人間が戦争をし、人を殺すのか。なぜ世界中で犯罪が起こっているのか、そしてなぜ犯罪はなくならないのか³。「理性・知性・良心」は抽象概念であり、これらを用いて科学的・客観的に性的指向の先天性・後天性を論じることはできない。

4. 後天的要因

次に同性愛の後天的要因について検討する。楊は同性愛は先天的なものではなく生後獲得した性質であるとする。果たしてこの後天的要因の根拠とされている研究に妥当性はあるだろうか。

4.1. Irvin Biber et al. (1962) の研究

楊の主張 (6)

同性愛を誘発させる要因についての研究結果は多くあります。家族理論では、同性愛者の母は、子供と密接に結合した親密な母として、子供に対して過度に統制的であり、抑圧的な母が多く、同性愛者の父には、子供と離れていたり、敵対的であったり、あるいは、子どもに対して拒否的である父が多い、という研究結果があります。また、同性愛者の子供は、幼少期には父を憎んだり恐れたりした子供が多いと言われます。(I.Bieberらの研究、1962年) (楊 2022a: 64)

³ 楊は次の日本の犯罪情勢を「理性・知性・良心」を備えた人間の行為としていかに科学的に説明するのか。「令和2年における刑法犯の認知件数は、61万4,231件、検挙件数は、27万9,185件、刑法犯の検挙人員の罪名別構成比は、窃盗が全体の48.5%を占め、続いて暴行(13.6%)、傷害(10.3%)、横領・遺失物等横領(6.6%)、詐欺(4.6%)の順となっています(警察庁の統計による。)」(検察庁HPより)

Irving Bieber はアメリカの精神分析家で *Homosexuality: A Psychoanalytic Study of Male Homosexuals* (1962) の中で同性愛は獲得条件（後天説）によるものであるという立場をとっている。ここで注意しなければならないのは、Bieber の研究は 60 年前のものであり、この本が出版された後、精神分析の世界では同性愛の研究が全くなされていないということはない。なぜ楊は半世紀以上も前の研究を根拠に同性愛が後天性のものであると主張しているのだろうか。

最近の研究では Bieber の「家族理論」（当事者のおかれた家族環境に問題があって、人はその影響を受けて同性愛者になる）とする考えはすでに誤りである、と精神分析の専門家間で了解されている。もし Bieber が主張しているように抑圧的な母親や子供に対して拒否的な父親の影響があるということが同性愛の要因として強い可能性があるならば、また同性愛は病気であり治療可能であるという説が認められていたならば、過去 60 年間、精神分析の分野では Bieber の主張の妥当性を検討するために繰り返し検証が行われ、彼の主張が「定説」となって 2022 年現在でも受け入れられていたであろう。しかし、現実はそうなっていない。1973 年、アメリカ精神医学会は精神疾患のリストから同性愛を削除したが Bieber 自身は亡くなるまで自らの誤りを認めなかったという。（The New York Times, Aug. 28, 1991）

4.2. Sigmund Freud (1953) の研究

次に楊は Bieber (1962) よりもさらに古い精神分析の大家であるフロイトの研究を根拠に子どもに性の役割モデルを示せなかったことが同性愛の原因となるとする：

楊の主張 (7)

また、親の誤った性の役割モデルの影響です。弱くリーダーシップがない父親、あるいは愛がなく無関心な父親、また強い男らしさを低評価する母親、あるいは夫から愛されず無視される母親が息子を過剰保護し、愛の対象者となること、子供を同性愛者とさせる原因である、と考えられています。つまり、家庭で正しい性の役割モデルを持った親の下で十分な愛を受けながら育っていないことが、同性愛が起こること原因であるというものです。（Sigmund Freud の研究、1953 年）（原文ママ）⁴（楊 2022a: 64-65）

⁴ 楊の論文ではフロイトの 1953 年の出典が明記されていないが、楊の著書『同性愛と同性婚の真相 — 医学・社会科学的な根拠 —』（2022b）には同様の記述とフロイトの引用があり、これが英語版のフロイト全集に収められた “Three Essays on the theory of Sexuality” であることがわかった。

ここでは理論的な細部には立ち入らずに資料に基づいてフロイトの考え方を示す。同性愛の要因については楊が引用した考え方をフロイトがしていたことは間違いない。しかし、その一方でフロイト自身が同性愛の先天性を認めていたと思われる資料がある：

ホモセクシュアリティは歴史を通じて様々な人たちに見られたものである。(中略) 彼らのセクシュアルオリエンテーションはヘテロセクシュアル同様、先天的なものである。現時点ではホモセクシュアルに結婚やヘテロセクシュアルの接触を持つことを促すのは有効ではないという見解に達している。(中略) 第三者の利害を犯すものではないにもかかわらず、ホモセクシュアル自身のセクシュアリティを否定しているという点で、この法律は人権を著しく侵害するものである。(中略) ホモセクシュアルも他の者同様、市民としての義務を負っている。立法者は当該の法律を廃止し、彼らに同等の市民権を与えることを、我々は正義の名において強く要請する。(イサイ 1996: 16-17, 下線は引用者)

この文書は 1930 年に作成された要望書である。ドイツの刑法では 1871 年以来同性愛関係を犯罪と見做していたが、フロイトは他の学者や識者らと共にこの要望書にサインをし、犯罪とすることを撤回するよう要求している (イサイ 1996: 16-17)。

また、フロイトは同性愛を病気とは見なしていなかったということも分かっている (Abelove 1993)：

ホモセクシュアリティは確かに優位性があるわけではない。しかし、それは恥ずべきものではなく、悪徳でも、退廃や墮落と言ったものでもない。ホモセクシュアリティは病気としては分類され得ない。(中略) 古代にも現在にも尊敬に値する人の中にはホモセクシュアルが数多くいた (プラトン、ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ビンチ等)。ホモセクシュアリティを犯罪だとして罰したり虐待したりすることは正義の名に値しない。「あるアメリカ人の母親への手紙」金城訳、下線は引用者)

4.3. Anderson らの発達理論

次に楊は幼児期の不遇な家庭環境や貧困も同性愛の要因となるとする：

楊の主張 (8)

発達理論においては、幼少期において否定的な親子関係、否定的な経験、性的トラウマ、貧困、不遇な家庭環境、友人たちからの排斥やいたずら等が精

神障害を生じさせると見ますが、同性愛の発生も同様であるということです。
(P.Anderson らの研究、2012年) (楊 2022a: 65、原文ママ)

Anderson and Blosnich (2013) の研究では、小児期の ACE (Adverse Child Experiences) 例えば身体的・性的・心理的虐待が同性愛の子どもよりも性的マイノリティに多いという結果をだしている。しかし、これは相対的な割合の話であり、子どもが ACE の被害にあったことが原因となって被害者が性的マイノリティになるという因果関係は見いだせないとする。なぜなら、(1) 子どもの性的指向に関わらず全体の回答者の 50% 以上が 1 つの ACE を報告、(2) 回答者の 25% 以上が少なくとも 2 つの ACE を報告、(3) 30.1% が身体的虐待、19.9% が性的虐待を経験、(4) 人口に占めるレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル (またはトランスジェンダー) の割合は 3.4% に過ぎない、(5) ACE が性的指向に関わるとすれば LGB の人口割合は 3.4% よりももっと高いはずである、(6) 被験者となった成人の性的マイノリティが 100% ACE の被害を報告しているわけではない。仮に幼児期の虐待が当該人物の性的指向に影響を与えるならば全ての LGB が ACE を報告しているはずである。しかしそのような研究結果や事実はない。よって、楊の主張は退けられる。

4.4. 性的虐待説

楊の主張 (9)

幼少期における同性からの性虐待の経験が、同性愛の発生の原因であるという見解があります。多くの研究論文は、多くの同性愛者は、幼少期に同性の大人から性的虐待を受けたという経験を報告しています。(A.L.Roberts らの研究、2013年) (楊 2022a: 65)

Roberts et al. (2013) の研究では幼児期に受ける虐待と出現するセクシュアリティとの順序が確認しにくいため因果の方向が分からないとしている。つまり、先行研究の結果からは子どもに同性愛的傾向があるため性的虐待を受けるのか、性的虐待をうけたことが原因で性的指向に変化があるのかが不明だとする。これを踏まえ Roberts et al. (2013) では、「性的指向と幼少期の虐待との関連を促す因果関係は双方向的であり、虐待の種類によって異なり、性別によって異なる可能性があることを示唆している」とする。つまり、はっきりと性的虐待が同性愛の原因であると特定されているわけではない⁵。

⁵ Roberts et al. (2013) には専門家からの批判がなされている (Bailey and Bailey (2013) を参照)。また、Xu and Zheng (2015) では非異性愛であることが幼児期の性的虐待のリスクを増大させるとしている。

4.5. 漫画・動画等の影響説

楊の主張 (10)

そして、同性愛を擁護する社会的な環境、即ち、同性愛を好感的に表現している映画や動画やBL/GL漫画に興味を抱き、同性愛行為をすることによって同性愛者になることもあります。日本でも同性愛の性行為をリアルに描写する猥褻な動画に青少年が容易にアクセスすることができ、青少年の心に同性愛の性行為をしてみたいという願望をもたせます。そのような願望によって同性愛の性行為をするようになり、同性愛の中に陥ってしまうのです。このような環境の中で、同性愛が社会に浸透して行きます。(楊 2022a: 65)

楊のこの部分の主張には参考文献が示されておらず、主張を裏付ける根拠が全くない。また cinii および google scholar を用いた検索でも漫画や動画によって同性との性的接触が促進されたとの研究はなかった。ここで私たちはもう一度科学的な手法というもの何かを確認しておく必要がある。科学的手法が目指すのは「あくまで〈客観性〉、つまり現象としての確かさにもとづく結論であり、この結論を認めず、主観的な洞察にのみ依存する〈神秘主義〉は排除する」(シャーマン 2003: 57)。

5. ディスカッション

楊 (2022a) は最初に「今まで、米国において同性愛に関する科学的な研究結果が多くありますが、日本では殆ど紹介されませんでした。日本人の殆どが、同性愛は生まれつきで変わることのない性的指向であると誤解しています」と指摘していた。先天性と後天性という2つの主張ならびにそれについての研究結果が多数あるにも関わらず、先天性は否定されるべきものであり、後天性の要因こそが正しく、日本人はそのことを知らないと楊は主張する。

これまで筆者が反論を加えてきたように、先天説では遺伝子解析についての研究が行われており、胎児に対する男性ホルモン・女性ホルモンの影響が子どもの性的指向に影響を与える可能性も指摘されている。そしてそれは日本のインターネットのニュースでもテレビニュースでも取り上げられていることであり、それを無視して「日本では殆ど紹介されませんでした」とするのは、楊論文 (2022a) の読者を一方的な主張 (ここでは後天説) に導くミスリーディングでしかない。

一方、麗澤大学の八木秀次(憲法学)は楊と同様に同性愛は先天的なものではないという主張をしている (八木2022a, 2022b)。八木は主にニール・ホワイトヘッド (Neil Whitehead) の著書 *My Genes Made Me Do It!: Homosexuality and the Scientific Evidence* で展開されている議論を支持しているが、Neil Whitehead はアメリカで

反ゲイ運動の急先鋒として知られている⁶。Whitehead は地質学者であり同性愛に関する論文は自身に関わる*The Journal of Human Sexuality*に発表された数本及びキリスト教と同性愛についての本への寄稿のみである。他の研究者と共同執筆したEffects of therapy on religious men who have unwanted same-sex attraction (2020) は*The Linacre Quarterly*に投稿された論文だが、統計処理に問題があるとしてSage出版社から出版を撤回されている⁷。Whiteheadは脳科学、遺伝子学、内分泌学、精神分析学の専門家ではなく、またヒトの性的指向に関する科学的な実験を自分自身が実際に行って過去の先行研究の検証をしているわけでもない。このような同性愛嫌悪に基づく「科学的」主張に信憑性があると言えるだろうか。

性的マイノリティに関する問題は、例えば2021年6月に提出が見送られた「同性愛差別禁止」法案や、同性婚といった社会問題、すなわち政治・司法判断に否応なく関わらざるを得ない問題である。

先天説を支持する側は同性愛や両性愛といった性的指向は先天的なものであり、病気や精神異常でもなく本人の意思で変更することのできない当事者の生まれ持った特性であるとするに賛同する意見が多い。一方、後天説の主張は、生後に親の影響やトラウマなどによって生じたものであり、それは「治療可能」なもので、当事者がそう望めば異性愛になることもできるとする⁸。それをせずに同性愛に執着するのは当事者に責任があるとして同性愛をはじめとする性的マイノリティに対する差別禁止を考える必要はなく、(異性愛になろうと思えばなれるのだから) 同性婚など到底認められないとする意見へとつながる。

本稿執筆時点(2022年8月)では、先天説をとる研究成果が後天説の研究成果よりも多く発表されている。(Diamond 2021, VanderLaan et al. 2022等)これまでの場の主張に対する反論でも指摘したように、生後の影響を受けて同性愛者になるという

⁶ Whitehead の *My Genes Made Me Do It!* は自費出版された書籍(編集者のチェックを受けずに自分の書きたい内容を自由に書いて出版できる)であり、同氏は同性愛の転向療法を推し進める National Association for Research & Therapy of Homosexuality (NARTH、同性愛の研究と治療のための全国協会)に所属している。Whitehead 及び NARTH の批判については Throckmorton (2012) 等を参照のこと。

⁷ RETRACTION NOTICE (撤回のお知らせ)には論文の撤回理由について詳しく書かれている。 <https://journals.sagepub.com/doi/pdf/10.1177/0024363918788559>

⁸ 朝日新聞 DIGITAL 版(2020.12.23)の記事では同性愛が「治療可能でない」にもかかわらず、同性愛の当事者自らが「同性愛矯正団体」を立ち上げ、28年間も二セの矯正セラピーを行ってきたと告白している。転向療法(Conversion Therapy)の是非については Andrea and Redondo (2022) を参照。

研究では、古い学説を根拠にする例が見られたため、その部分では主張が弱いと思われる。また神学者の立場からこれまでの科学的知見を検討し、社会環境が性的指向の決定に重要な役割に担っているという証拠が今まで提示されていないとする研究もある (Cook 2020)、さらに専門外の筆者が見ても根拠とする調査方法やデータ数に問題があるように思われるものが見られる⁹。

ここで、反論の部分では触れなかった先天説を支持する2つの重要な研究を紹介する。まず男性同性愛者では「兄弟効果」(Fraternity Birth Order) という説が20年ほど前から知られており、「兄が多い男性ほど同性愛者になりやすい」とされている。ヒトの染色体はXX型とXY型があり、女性はXX、男性はXYであるが、男児を妊娠すると母親が男児がもつY染色体(の中にある「NLGN4Y」というたんぱく質)を異物と認識し抗体を作り出す。母親側は男児を妊娠する度にこのNLGN4Yを攻撃する抗体を作り出し、結果、兄が多い末っ子の男児ほど胎児のときにこの抗体の影響を受けるという。(CNN co.jp 2017.12.13, Bailey 2018, Blanchard 2019)

次に、先に触れたように科学的な研究は検証可能性によってその主張が繰り返し正しいものであるかどうか確かめられる。しかし、中には倫理的な理由により再現することができないものもある。男の新生児で出生時にペニスの形態に異常が見られた、もしくは手術中の事故によりペニスを切り取られてしまったというケースがアメリカでは1960年から2000年までに7例あったという。これらの男児はそれぞれ手術によって「女」として適合手術を施され、女の子として育てられたという。環境要因が強く働くのであれば、この子どもたちは性自認は女性、性愛対象は男性とならずであるが、フォローアップ調査では1名以外の6名が性自認を男性であるとし、完全にもしくは殆ど女性を性愛の対象とすることが分かった。この結果は同性愛の先天的要因を強く支持するものである。(Bailey et al. 2016)

ヒトの性的指向が生まれた後の社会的環境要因によって影響を受けることを証明するためには、繰り返し「検証」を行わなければならない。先天的要因に根拠がないと

⁹ 例えば、Pimentel and Garcia (2022) では、同性愛傾向のある被験者455人にアンケート調査をしているが、この455人の中から異性愛・同性愛(ゲイ・レズビアン)・バイセクシュアルを区別しているため、非異性愛者の総数が310人(68.13%)となり、日本その他で行われている調査数(約3%)を大きく上回っている。またAsrina and Palutturi (2022) では12名の被験者から聞き取り調査をし、「マカッサル市では、同性愛者の形成は社会環境と恋愛のトラウマの影響によって動機づけられていた」「学歴の低いブルクンバ地区では被験者が生活費を得るために同性愛者になることを選択した」とする。少ないサンプルに基づく過度の一般化は避けるべきである。また経済的理由で同性を相手にセックスワーカーになることと当該人物の性的指向は必ずしも一致しない。

いうことを示したからといって、後天的要因が支持されたことにはならない。また、例えば幼児期の性的虐待が後の性的指向に影響を与えるという主張を検証する場合には、研究者は被験者の証言並びに調査対象と観察者（科学者）との関係を慎重に考慮しなければならない（被験者の「虚偽記憶（false memory）」¹⁰の問題と観察者が非観察者に影響を与えるため）。またどのような仮説の検証を行なっているのかを被験者に知らせると反応が変わるため、盲検法（被験者に実験のしくみを知らせない）や二重盲検法（被験者も実験者も実験内容を知らされない）が取られている。このように人間を対象とする社会科学の研究では非常に細部にわたって研究方法・計画を立てて実験を行う必要がある。そういった前提に立たない実験では研究者が引き出そうとするデータ結果になる場合がある。（シャーマン 2003: 113）

管見では精神分析の専門家からフロイトの説が繰り返し検証されるということはほとんど行われていない。楊の指摘するように後天説が有力であれば、家庭環境や幼児期の体験が成人になってからの性的指向に影響を与えるという研究も繰り返し検証されていて然るべきであり、それなりの研究成果が査読付きの学術誌（学会誌）に発表され google scholar などで容易に検索・アクセスできる状況にあるべきであるが、現状はそうっていない。

本稿執筆時点（2022年8月）での最新の科学的知見は *EMBO reports* に掲載された Andrea Rinaldi (2022) の論文、‘I was born this way’ である。この中で Rinaldi は「人間の性的指向は、出生前因子と遺伝的差異が混在していることで説明できる可能性がある」としている。朝日新聞 DIGITAL (2022.7.28) では八木が「専門家」として国会議員に最新の知見を求められ、意見を述べたとされるが、先天性の要因が大きくかかわっている可能性は伝えられているのか。先述したように、先天説・後天説は科学的な探究だけでなく、同性愛者の保護（差別をしない法律の制定）や同性婚といった社会的にさまざまな事象と関連があるため「専門家」は正確な知見を提供する義務がある。科学には「これが正しい」ということはない。科学的な研究の成果は一時的なものであり、それが常に他の研究者によって「検証される」ということを前提にしている。今回は楊の論文への反論を試みたが、本来であれば、先天説・後天説の議論は神学者（楊）、憲法学者（八木）や筆者（言語学）によってなされるべきものではないはずで、実際の遺伝子学、内分泌学、精神分析学、心理学などの専門家間で議論されるべき問題であると考え。門外漢の知識には限界がある。今後の専門の研究者からの研究発表・議論などが望まれる。

¹⁰「実際にはおこっていないことを思い出すこと、あるいは、実際に起こったのとはことなるように思い出すこと」（宍崎・関口 2022: 29）。これについては Otgaar et al. (2022) も参照のこと。

参考文献

- Abelove, Henry. 1993. Freud, Male Homosexuality, and the Americans. *The Lesbian and Gay Studies Reader*, pp. 381-393. (初出は1985)
- Anderson, Judith P. and John Blosnich. 2013. Disparities in Adverse Childhood Experiences among Sexual Minority and Heterosexual Adults: Results from a Multi-State Probability-Based Sample. *PLOS ONE*. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0054691>
- Andrea, G. and M. Campo Redondo. 2022. Is conversion therapy ethical? A renewed discussion in the context of legal efforts to ban it. *Ethics, Medicine and Public Health*. 20. <https://doi.org/10.1016/j.jemep.2021.100732>
- 朝日新聞 DIGITAL. 「『同性愛直す』セラピスト 自分も客も偽り続けた28年」 (2020.12.23)
- 朝日新聞 DIGITAL. 「自民党の性的マイノリティ特命委 八木秀次氏からヒアリング」 (2022.7.28)
- Asrina, Andi. and Sukri Palutturi. 2020. The formation of homosexual behavior in South Sulawesi Province (study on young homosexual in Makassar City and Bulukumba District) *Systematic Reviews in Pharmacy*. 11(12), pp. 477-483.
- Bailey, Drew H., J.M. Bailey. 2013. Poor Instruments Lead to Poor Inferences: Comment on Roberts, Glymour, and Koenen (2013). *Archives of Sexual Behavior*. 42, pp.1649–1652. <https://doi.org/10.1007/s10508-013-0101-5>
- Bailey, J. Michael., Paul L. Vsey, Lisa M. Diamond, S. Marc Breedlove, Eric Vilain, and Marc Epprecht. 2016. Sexual orientation, controversy, and science. Association for Psychological Science. *Psychological Science in the Public Internet*. 17 (2), pp.45-101.
- Bailey, J. Michael. 2018. The fraternal birth order effect is robust and important. *Archives of Sexual Behavior*. 47, pp. 17-19.
- BBC NEWS JAPAN. 「女性の指の長さは「性的指向と関係」か＝英研究」 (2018. 10. 18) <https://www.bbc.com/japanese/45898389>
- BBC NEWS JAPAN. 「『ゲイ遺伝子』は存在しない、米ハーヴァード大などの研究で明らかに」 (2019.8.30) <https://www.bbc.com/japanese/49520044>
- Blanchard, Ray. 2019. Recent findings on Fraternal Birth Order and homosexuality males. *Archives of Sexual Behavior*. 48, pp.1899-1900.
- CNNco.jp 「兄のいる男性、同性愛者になりやすい傾向『母親の抗体』が理由か」 (2017.12.13) <https://www.cnn.co.jp/fringe/35111856.html>
- Cook, Christopher C. H. 2020. The cause of human sexual orientation. *Theology and Sexuality*. 37, pp. 1-19.

- Diamond, Lisa M. 2021. The new genetic evidence on same-gender sexuality: Implications for sexual fluidity and multiple forms of sexual diversity. *The Journal of Sex Research*. 58(7), pp. 818-837.
- Freud, Sigmund. 1935. 'Letter to an American Mother' Gay/Lesbian Resources.
<http://www.psychpage.com/gay/library/freudsletter.html>
- 壺崎真由・関口理久子. 2022. 「虚偽記憶研究の現状と課題」『関西大学心理学研究』 13, pp.29-54.
- Isay, Richard A. 1994. *Being Homosexual: Gay men and their development*. Jason Aronson Inc. (イサイ,リチャードA.著 金城克哉訳. 1994. 『ホモセクシュアルであるということ-ゲイの男性と心理的発達-』 太陽社)
- 検察庁. 「犯罪情勢」 https://www.kensatsu.go.jp/hanzai_gaiyou/keihou.htm
- Lauman, Edward O., John H. Gagnon, Robert T. Michael, and Stuart Michaels. 1994. *The Social Organization of Sexuality: Sexual Practices in the United States*. The University of Chicago Press.
- Levine, Andrew. 2022. Sexualities and Geographic Mobility Between Childhood and Adulthood in the United States. *Demography*. 59 (4), pp. 1541-1569.
- 松岡宗嗣. 「『同性愛は依存症』 神道政治連盟議員懇談会で差別的冊子配布」 YAHOO!JAPANニュース(2022.7.22)
- 日経ビジネス. 「『異性愛』か『同性愛』かは何で決まる？」 (2016.6.15)
<https://business.nikkei.com/atcl/skillup/15/111700008/061300072/>
- 日本経済新聞ウェブ版. 「東大、Esr2bの遺伝子に変異が生じたメスのメダカはオスからの求愛を受け入れず他のメスに求愛することを見出す」 (2021.2.27)
添付リリース：https://release.nikkei.co.jp/attach/605666/01_202102251650.pdf
- ニュースウィーク日本版. 「『一卵性双生児の遺伝情報は同一ではない』ことが明らかになってきた」 (2021.3.15)
<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2021/03/post-95833.php>
- Otgaar, Henry., Mark L. Howe and Lawrence Patihis. 2022. What science tells us about false and repressed memories. *Memory*. 30, pp. 16-21.
- Pimentel, Jonald L. and Anna J. Garcia. 2022. Genetics or Environment: Tracing the root cause of increasing homosexual population. *Advances in Social Sciences Research Journal*. 9 (4), pp.369-376.
- Rinaldi, Andrea. 2022. I was born this way: New research confirms that a mix of prenatal factors and genetic differences could explain human sexual orientation. *EMBO reports*. 23 (6) <https://doi.org/10.15252/embr.202255290>
- Roberts, Andrea. L, M. M. Giymour, and K. C. Koenen. 2013. Does maltreatment in

- childhood affect sexual orientation in adulthood? *Archives of Sexual Behavior*. 42 (2), pp. 161-171.
https://www.researchgate.net/publication/230849901_Does_Maltreatment_in_Childhood_Affect_Sexual_Orientation_in_Adulthood
- Robertson, Ronald E., Felix W. Tran, Lauren N. Lewark and Robert Epstein. 2018. Estimates of Non-Heterosexual Prevalence: The Roles of Anonymity and Privacy in Survey Methodology. *Archives of Sexual Behavior*. 47, pp. 1069-1084.
- Shermer, Michael. 2002. *Why People Believe Weird Things: Pseudoscience, Superstition, and Other Confusions of Our Time*. Holt Paperbacks. (マイクル・シャーマー 著 岡田靖史訳 2003. 『なぜ人はニセ科学を信じるのかI』ハヤカワ文庫)
- テレ朝 news . 「“性指向”たった1つの遺伝子が左右 東大研究」(2021.2.27)
https://news.tv-asahi.co.jp/news_society/articles/000208364.html
- The New York Times . “Irving Bieber, 80, a Psychoanalyst Who Studied Homosexuality, Dies” (By Steven Lee Myers, Aug. 28, 1991)
- Throckmorton, Warren. 2012. NARTH, the new epigenetic model and confirmation bias.
<https://onl.sc/7gih7Rj>
- 塚原伸治. 2018. 「マウスの脳内で新たに見つかった性的二型核」『比較内分泌学』44 (163), pp.7-11.
- VanderLaan, Daug P., Marvina N. Skoska, Diana E. Peragine, Lindsay A. Coome. 2002. Carving the biodevelopment of same-sex sexual orientation at its joints. *Archives of Sexual Behavior*. DOI: 10.1007/s10508-022-02360-1.
- Xu, Yin. and Yong Zheng . 2015. Does sexual orientation precede childhood sexual abuse? Childhood gender nonconformity as a risk factor and instrumental variable analysis. *Sexual Abuse*. 29 (8), pp. 786-802.
- 楊尚眞. 2022a. 「日本で知られていない同性愛と同性婚の真相」歴史認識問題研究会編『歴史認識問題研究』10, pp.63-77.
- 楊尚眞. 2022b. 『同性愛と同性婚の真相—医学・社会科学的な根拠—』22世紀アート22nd CENTURY ART. Kindle 版.
- 八木秀次. 2022a. 「『同性愛は先天的』否定する科学的証拠」『正論』609, pp.240-249.
- 八木秀次. 2022b. 「科学が否定するLGBT問題の前提」『明日への選択』438, pp.4-9.

**“Nature or Nurture?”: Argument against Yang’s paper (2022)
‘The unknown truth about homosexuality and same-sex
marriage in Japan’**

Katsuya KINJO

Japanese various media reported that a pamphlet about sexual minorities and surname use among married couples was distributed to Liberal Democratic Party lawmakers’ gathering at a hotel held on June 13, 2022. It was said that the pamphlet was a lecture note presented by Yang Sang Jin who is a professor at Hirosaki Gakuin University. The author of this paper could not obtain the pamphlet, but found Yang’s paper titled “The unknown truth about homosexuality and same-sex marriage in Japan”(2022), in which he discusses causes of homosexuality from the point of view of acquisition or learning after birth; which leads to the claim that one can eliminate such a trait with his/her strong will power.

Yang denies genetic, hormonal and innate causes and emphasizes the importance of environmental factors such as family (e.g. strong mother and weak father), sexual abuse on childhood. This paper tries to argue against Yang’s claims with provision of various recent studies.